DEATH DEATH DEATH

written by **HADEYA**

1

殺られる前に殺っちまえ———それが〈俺〉の流儀だ。
その時もそうだった。シカゴ中央銀行を叩き、金庫に眠る、ありったけの現ナマを担いで路上に出た時も。
足早に俺は歩く。サングラスの視界には目当ての逃走車の黒いセダンが目に止まっていた。あと少しで……もう15メートルで車に到着する。心の中でホクソ笑んだ。その時までは。

その時、隣を歩く通行人が肩から血を流しながらブッ倒れた。上から撃たれたに違いない。どこかで警察の狙撃手がスナイパーズ・ライフルを構えているのだ。照準を俺に定めながら。
俺の行動は素早かった。クルリと上半身を翻すと、現ナマが詰まったバッグを右肩に背負い直し、スーツ下に隠し持った、マシンガンを構えた。
殺られる前に殺っちまえ———それが俺の流儀。どこで、その流儀を学んだか。過去から、だ。

2

愛車を運転する———ノロノロ運転で。法定速度順守。安全運転。
赤信号で停車した。妻に雑談を振る。
「俺は自分の流儀を過去から学んだんだ」
「どんな流儀？」
「殺られる前に殺っちまえ、ってな。聞きたいか、俺の過去」
「聞かせて」
「忘れもしない冬の夜の出来事だ。その晩、俺は警官の一団とトラブった。悪徳警官の一団と」
赤マルボロに火を点けた。煙を深く吸い込みながら俺は自分の過去について語り始めた。
「連中は海岸で俺を始末しようとした」

3

さざ波が流れる海岸には〈俺〉がいる。連中……悪徳警官、三人の一人が俺の腹部を蹴り上げた。くぐもった悲鳴を俺は上げた。
「俺たちを嘗めてるだろう？」
うつ伏せに倒れた俺を見下しながら警官の一人が言った。声には怒りが感じられた。それもその筈。もう三カ月も上納金を滞納している上、俺のヘマで内部調査が始まったから、だ。
「……ケツは拭く……待ってくれ」
「お前のせいで足が付きそうだ」
「分かってる……済まない」

「御免で済んだら警官は職に炙れちまう。そう思わないか？」
そう言い、警官はピストルを俺に向けた。銃口を俺の額に押し当てる。
「もう一回、チャンスをくれ……」
「殺られる前に殺っちまう。それが俺たちの流儀だ」
警官がピストルの撃鉄を起こした。
「遺言はあるか？」
「……ある。いい事を学んだよ」
突如、俺は警官のピストルを掴み、足を蹴り払った。力付くでピストルを奪うと躊躇なくトリガーを引いた。

4

もう一人の警官が銃を抜くより早く、トリガーを引いた。警官が頭から血を流しながら仰向けに倒れる。銃声を耳にした最後の警官が一目散に逃げて行く。走る警官の足に照準を定める。銃声と共に警官が倒れた。 倒れた警官に向かって、歩く。一歩一歩、確実に。止めを刺す為に。
警官の元に着いた。警官が顔を向け、泣き言を言う。
「頼む！ こ、殺さないでくれ！」
「悪い事を考えてるんだろう？」
「何も考えていない！」
「いいや、考えてるさ。殺られる前に殺っちまえ、ってな」
二発の銃声が海岸に鳴り響いた。マズルフラッシュが光り、警官が倒れた。

5

運転席に備え付けの灰皿でタバコを揉み消す。妻は興味深そうに尋ねた。
「殺られる前に殺っちまえ、って事？」
「そう言う事」
白煙を吐いた。車は夜のシカゴをノロノロ運転で走行中。車窓を景色が移ろい行く。俺———アーロン・ヘルナンデスは運転を続けた。
「いつまで〈仕事〉を続けるの？」
俺は「分からん」と答えた。事実だ。雑談を続けた。
「明日、デカいヤマを踏む。それが片付いたら考えよう」
「……私、時々、不安になる。いつまで、この幸せが続くのかって」
「続くさ。少なくとも当分は。なあ———」
妻の手を握った。
「———心配するなって。今度のヤマも上手く行くさ。そうしたらバカンスに行こう」
「上手く行ったら、ね」
「愛してる」

「私も愛してる」
俺たちはキスを交わした。

6

駐車場を出て、妻と共に路地裏を歩いた。前方から上着のポケットに手を入れた男がやって来る。こちらを探っているのを〈察知〉した。長年の勘で分かる———強盗。
俺は妻を守るよう前方に踊り出た。同時に強盗がポケットからピストル———グロックを抜いた。
「金を出せ！ さあ、早く！」
「分かった。今、出す」
言いながらポケットに手を入れた。愛銃の入ったポケットに。ポケットの中でトリガーを引いた。乾いた銃声がして強盗の腹部を撃ち抜いた。間髪入れず、ポケットから銃を出し、倒れた男の頭部を撃つ。クルリと振り向き、悲鳴を上げようとする妻を人差し指で静止する。
「もう大丈夫。行こう」
俺は銃をポケットにしまいながら、空いた手で妻の手を取り、足早に路地裏を後にした。自分でも驚くほど俺は冷静だった。

7

ヨットで航海する。缶ビールを手に。妻———ジェシカ・ヘルナンデスは日光浴をしている。アーロンは陽光が煌めく海を眺めていた。
遠くから〈何か〉が迫って来る。グングン、グングン迫って来る。
アーロンはサングラスの下の目を凝らした。何か、は大きなカジキだった。カジキはヨットに並んで泳いでいる。思わず、笑みが零れた。缶ビールを飲み干すと、ジェシカの元へ向かった。
ジェシカの隣で日光浴をする。空を眺めながらアーロンは至福を感じている。
唐突にアーロンは切り出した。
「俺と結婚するか？」
ジェシカも唐突に答える。
「答えは、イエス」
空にはカモメが飛んでいる。アーロンはボソリと呟いた。
「……最高の気分だ」

8

アラームで目が覚めた。隣にはジェシカが寝ている。スヤスヤ、安らかな寝顔で。
アーロンは冷蔵庫からコーヒーを取り、グラスに注いだ。そのままグラスを手に寝室に戻る。「起きたの？」
目を閉じたまま、ジェシカが尋ねた。
「仕事の時間だ」

「気を付けて」
「合流地点で会おう」
アーロンは寝室を後にした。同時にジェシカは身を起こし、スマートフォンを手に取った。〈元締め〉にショートメールを打つ。

―――主人がヤマに向かった。追って連絡する。

9

アーロンは夜明けの海岸を歩いている。潮風が頬を掠める。
背後でクラクションが鳴り、目の前に黒いセダンが停車した。アーロンは後部座席に乗った。座席には無造作にマシンガンが置かれている。
「準備は？」
運転手が問う。マシンガンを掴み、アーロンは答えた。
「バッチリだ。派手に決めようぜ」
アーロンはマシンガンを手に車窓の風景を眺めていた。

１０

殺られる前に殺っちまえ―――それが〈俺〉の流儀だ。その時もそうだった。シカゴ中央銀行を叩き、派手に市街での銃撃戦を繰り広げた時も。

今、俺は走って逃げている。背中に大量の札束が入ったバッグを背負い。周囲は車両包囲が敷かれているだろう。警官も大量に配備されている筈。逃げ道はない。袋小路だ。
その時、前方に一台のオープン・カーが急停車した。運転席の女が叫ぶ。
「乗って！」
考えてる暇はない。俺は女のオープン・カーに乗り込んだ。車が急発進する。
息も途切れ途切れに俺は叫んだ。
「お前、誰だ！」
「助けに来た、謎の助っ人。報酬は取り分の半分でどう？」
「乗った！ で、どう言う手で行く！」
「後部座席を見て」
後部座席を見た。ロケットランチャーが置かれている。
「……無理だ。車両包囲は突破できない」
「出来る」
彼女がハンドルを切った。裏道へ出る。前方にパトカーの車両包囲が敷かれていた。
後部座席に移動し、俺はロケットランチャーを掴んだ。照準を車両包囲に定め、トリガーを握る。
「行くよ！」

「行け！」
車が加速する。重いトリガーを引いた。ミサイルが飛んで行き、前方の車両包囲を吹っ飛ばす。そして———

１１

駐車場———車のトランクに積まれた札束の山。
「約束通り、きっかり半分だ」
女がトランクを閉めた。手を差し伸べ、俺は礼を述べた。
「世話になったな」
「お互い様。バイバイ」
握手を交わすと女は運転席に乗り、車を走らせた。車を見送り、サングラスを掛ける。バッグを背に俺は歩き始めた。
足を洗おう———歩きながら決心した。新たな決意を胸に俺は歩き続けた。白昼のシカゴの陽光は眩しい。その光は目に痛いほど眩しかった。
笑みが零れる。太陽を見た。ビルの屋上で何かが光った———マズルフラッシュ。

１２

撃たれた———右耳を。何とか這い蹲って、路地裏へ出た。そこに彼女はいた———俺の妻、ジェシカ・ヘルナンデスが。

……どう言う事か理解した。

「そう言う事」
ジェシカがハンドガン———ベレッタを俺に向けた。彼女のシルエットがくっきり浮かび上がる。俺は…… 俺は……プロとして、俺は……。
パァン！ パァン！ 乾いた二発の銃声が白昼の路地裏に響き渡った。（了）

キリミハデヤ
hadeyakirimi@gmail.com
81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ　口座番号
三井住友銀行（店番号**232**） 普通口座　口座番号：**7342872**